英米言語文化コース

先生に聞いた！

英米言語文化コースとは

このコースでは、カナダ、オーストラリアなども含む英語圏の文学、文化、英語自体について学び、英語の運用能力を高め、将来それを活かして、英語教員、英語を使う公務員、企業人になれます。しかし、このコースが目指しているのは、グローバル社会の即戦力の養成ではなく、英米の文化の中にある基本的な問題の理解を通じて、もっと深いレベルの交流ができる人材の養成を目指しています。このコースの教育の特色は、英語を読んでいく演習で、文学、文化、英語学、映画などの英語資料を、辞書を引きながら丁寧に読んでいきます。このプロセスは苦しいですが、それによって作品の持つ面白さがよりよく理解できます。高校生で、「学問的なことはわからないが漠然と英語好きである」とか、「英語に関心がある」という人は、ぜひ本コースに来てほしいと思います。

杉井先生の研究内容

私は一語一語にこだわって研究することを大事にしています。シェイクスピアで使われている、比喩や洒落などの言葉の技巧をあぶりだしていくのです。今は『尺には尺を（Measure for Measure）』というシェイクスピアの喜劇を研究しています。主人公のウィーン公爵がカトリックの修道僧に変装して自分の国に起こった事件を解決する話なのですが、そのやり方が異常に大げさで、観客に違和感を抱かせます。意地悪な見方をすると、自分が恰好をつけるために余計人民を苦しめているようにも見えるのです。"Measure for Measure"は聖書にある言葉で、この劇は昔から道徳的なことを教えていると解釈されてきましたが、ちょっと観方を変えると全く別の劇になるのが面白いですね。この時期、英国では宗教改革が起こっており、演劇においては不道徳な修道僧が一種の類型になっていました。このような時代背景の中でシェイクスピアが、どんな思いをもって修道僧への変装を描いたのかを考えながら研究しています。

英米言語文化コース教授
杉井正史先生

ちょっと観方を変えると全く別の劇になる（杉井先生）

オススメの人

ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）

37 篇の劇と 3 冊の詩を残した。彼ほど、言葉のほとばしり、機知の才、修辞の巧みさをもって、人間の諸相を描き切った劇作家はいない。彼が作る台詞は普遍性を持ち、時間も空間も離れた現代の日本人にも通用する。彼を知るには、彼の四大悲劇から入っていくのがいい。

コースに入ったきっかけ

もともと国語が好きで英語は嫌いだったのですが、高校生のとき、先生に英文法をしっかり教えてもらい、情報構造などが面白いと感じました。それをきっかけに英語を日本語と対比的に見ていく言語学がしたい、と思うようになりました。また1回生のときの授業で、それまであまり知らなかった文化面にも興味を持ったからです。

英米言語文化コース3回生
森本匡敬さん

オススメの人

高校生・中学生が主な対象だというので、ほかの方とは少し違った目線で……。英語が苦手な人も得意な人も、最近有名な英語講師「関正生」氏の著作物は一回、目を通しておくと面白いと思います。英語の本質が知れ、英語そのものへの見方が変わり、大学でも英語をやってみたい！ と思わせてくれるでしょう！ オススメですよ！

学生から見たコース

やはり英文学が好きな人が多いですが、英文法もできます。文学も言語も、好き嫌いせずにやってみると意外と面白いですよ。先生は早くから丁寧に卒論を見てくださる方もいて、親しみやすく、面倒見がよいと思います。「英語は好きだが、苦手だから……」という人も敷居は高くないのでトライしてほしいですね。

英米言語文化コースにとって「流行」とは？

「流行」という言葉は自分にとって縁遠いもののように思われる。一時的に火がついたものの多くは消えてゆき、ほんの一部の価値のあるものだけが残って次の世代に引き継がれていく。私の研究対象であるシェイクスピア研究にも、「〇〇主義」という新しいものが何度か流行った、が、ときが経つと、結局は堅実な実証主義が残るだけだった。しかし、シェイクスピアと言えば、エリザベス朝で一番の流行の劇作家だった。当時の演劇は、清教徒の勢力の強いロンドン市当局から、不道徳あるいは低俗な娯楽として、テムズ川沿いの猥雑な地区において、かろうじて認められていた。それこそ、熊イジメや闘犬と同格のいかがわしい娯楽だった。大学も出ておらず、俳優上がりの座付き劇作家は、先輩格の劇作家ロバート・グリーンから、「羽毛で飾り立てた成り上がり者の烏」と罵られていた。しかし、復讐、恋愛、滑稽、嫉妬のプロットにより大衆の支持を得て流行劇作家になり、人生の深淵を覗かせる名作を作り、幾多の同時代の劇作家の名は忘れられ、彼の名が残った。「不易」も「流行」を経ていることを忘れてはいけないのであろう。（文・杉井先生）

卒論

▼オーストラリア英語の特徴と変遷
▼『ジャズ』における音楽と文学の融合
▼Comparative Studies on Raymond Carver and Haruki Murakami

ドイツ語圏言語文化領域

ドイツ語フランス語圏言語文化コース

先生に聞いた！

ドイツ語圏言語文化領域とは

基本的には1回生でドイツ語の基本文法を学び、それをベースにドイツ語圏の文化・文学そのものにアプローチしていく領域です。1回生のときは別の言語を履修していた学生が来ることもときどきあります。

教員の専門は多彩で言語学、文学、どちらの教員もいますし、地域もドイツだけでなくオーストリア、スイスもカバーしています。

この領域は少人数なので自分のペースで勉強しつつ、やりたいことには適度な助力を受けて取り組むことができます。年2回の遠足をはじめ様々な行事があり、学生は自主的に留学生とお互いの言葉を教えあうタンデムの時間を設定しているようです。文学作品を中心に、歴史や地誌など複合的な学びができるところに面白さがあると思います。

高井先生の研究内容

私は、オーストリアのインゲボルク・バッハマンという女性作家について研究しています。彼女は第二次世界大戦が終わったころ文学活動を始めました。ドイツ人に排斥されたユダヤ系の人たちと繋がりが深く、彼らの自分たちの民族が受けてきた迫害を告発する文学に触発され、フェミニズムに目覚め、戦後の社会の混乱期のなかで女性がどう生きるかをテーマにしました。

学部生のとき、卒論のテーマに先生から勧められたのがバッハマンとの出会いでした。でもそのときは「面白いけど、今の私には無理だ。難しい」と思って、本棚に戻してしまいました。社会にでてフェミニズム的なものに対する感覚がわかるようになって、この作家の作品世界が理解できるようになったと思います。バッハマンは人間関係も面白く、色々な作家との繋がりがあって、ドイツでも新しい関連書が出るなど、まだまだ研究されています。これからも追いかけていきたいですね。

ドイツ語圏言語文化領域 准教授
高井絹子先生

文学作品を中心に、複合的な学びができる（高井先生）

オススメの人

ダニエル・ケールマン（1975-）はウィーン在住のドイツ語作家。『世界の測量』（瀬川裕司訳、三修社、2008 年刊）は 2005 年に出版されるや話題を呼び、各国で翻訳されています。18 世紀から 19 世紀にかけて、同時代を生きていた数学者ガウスと博物学者フンボルトそれぞれの世界の測り方。これを並べて提示する発想力に脱帽です。

ドイツ語圏言語文化領域 3回生
辻明日香さん

オススメの人

私がオススメしたい人は、グリム兄弟です。『グリム童話』は日本でも有名で、グリム童話そのものはもちろん、ディズニー映画などでもグリム童話をもとにした物語がたくさんあります。グリム兄弟は、各地の民話を童話集にまとめました。各国で、ずっと後の時代にも読み継がれる作品をまとめたグリム兄弟は偉大だと思います。

領域に入ったきっかけ

もともとは決めていなかったのですが、偶然オープンキャンパスでこの領域を訪れたとき、ゆるい雰囲気がいいな、と領域がコース選択の視野に入りました。1回生のとき、新修外国語の授業でドイツ語を訳すのが意外と楽しく、またグリム童話を研究したいと思い、それができる授業もあったので、このコースに決めました。

学生から見た領域

先生はお茶目で、尊敬できる方々です。先生との距離が近く、質問しやすいですよ。7月にはゾンマーフェストというソーセージを焼いたり、パンを食べたりするお祭りがあって、ドイツ語を取っている1回生も呼んで楽しいです。留学は全員ではありませんが、私は1か月、私と同じ3回生では1年、ハンブルク大学に行っています。

ドイツ語圏言語文化領域にとって「流行」とは？

疾風怒涛時代の次が古典主義で、その次がロマン主義、そのあとが写実主義だったっけ……。学生時代、文学史が苦手でした。数ある文学作品のなかから研究者が数篇を選び出し、「〇〇主義」でまとめたんだから漏れもあれば無理もある、などと生意気なことを考え敬遠していました。しかし教える側になって勉強してみるとこれが意外と面白い。数百年のスパンで見ると、時代の写し絵のような作品はたしかにあります。主義も一種の「流行」みたいなものかと思い当たり、さらに文学は、例えばユングのタイプ論がいうところの「思考」「感情」「感覚」「直感」の比重の異なる「内向的」な人間と「外向的」な人間による叙述のあいだを時計の振り子のように揺れ動いているのではないかと思うようになりました。あるものが幅を利かせると、やがて飽きがきて別のものがほしくなる、あるいは反発したくなる、そういう人間の心理は文学史からも透けて見えてきます。（文・高井先生）

卒論

▼ドイツ・ルネサンスとアルブレヒト・デューラー
—『黙示録木版画』に至るまでの足跡—
▼ドイツ語の未来形の定義について